水辺劇場都市“にいがた”としての再生 －新潟はもっと楽しくなる。もっと好きになる。－

■水辺劇場都市“にいがた”としての再生

計画地は信濃川をまたいで萬代橋、信濃川を中心とし、新潟市民の心象風景であり水辺で様々な活動が展開されることから水辺劇場都市・水辺劇場ゾーンと名付けます。

水辺劇場都市

水辺を中心として人の集まるにぎわい空間をつくる。

1. 水辺の積極的活用
   マリーナ、アゴラ、他門川堀再生
2. 積極的な立体都市公園制度の活用
   緑被率、交通拠点、都市農地（黒崎茶豆・水田・養蜂等）
3. 環境シュミレーション
   温熱、風環境、構造物の配置・形態、メガソーラー、風力発電
4. 防災（地震、津波、海面上昇、火災）対策
   防災拠点、ヘリポート、市民の避難
5. 水と土の芸術祭と水辺のライティング
   アート作品、ライティング
6. エリアマネジメント
   都市再生特別措置法、社会資本整備交付金、エリアマネジメント準備会

■新潟都市圏を取巻く状況

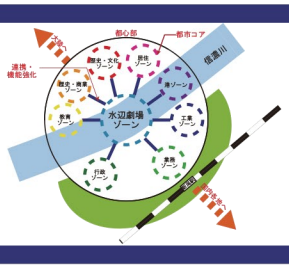
新潟都心部の中心を流れる大河‘信濃川’、そこを横架する国の重要文化財‘萬代橋’間近に迫る‘日本海’信濃川上流側に目を向ければ角田山や弥彦山のスカイライン。また、周囲には商業、業務、歴史文化等の各種施設が位置し、陸・海・空の高速化・国際化にも対応可能な社会基盤が整備されています。さらに、新潟と言えば‘雪’‘米’‘酒’‘魚’‘野菜’など、食に含めて日本をまるごと凝縮していると言っても過言ではない場所と考えます。

しかし、これらの資源は、有機的な活用どころか、そもそも単体としての利活用も十分な状況であるとは言えないのが生活実感としてあります。これは、各種規制の基での画一的で最低限の整備、点による取組み、つくることが目的化された整備、さらに昨今では財源不足等、考えられる要因を挙げると枚挙に暇がない状況であり、政令指定都市である県都新潟市も、地域間競争の激化やグローバル社会が進展する中、全国の地方都市と同様に、残念ながら低迷の一途を辿っています。

■基本的な考え方

明治時代に日本を訪れたイギリス人旅行家イザベラ・バード女史は新潟の堀割と家並みの美しさを絶賛しました。私たちはこの原点に立ち返り、商都として発展して来た歴史的経緯をふまえて、水辺を積極活用し中心部に人の集まる商都として、新潟の個性を際立たせる魅力的なまちを目指します。

ここでは、新潟市中心部を役割・機能別に都市コアとして別けてそれぞれのコアがその機能を高め、有機的に連携していきます。



■グランドデザイン・バックキャスティング方式を用いた段階的整備

第３フェーズ（20 年後）

航空写真　出典：新潟市 HP

■シュミレーション結果をふまえた建築形態・配置他への取組み

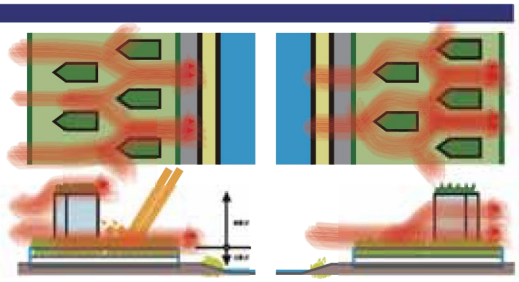
1. 風速と気温：風速が大きいと気温は低くなる。
2. 低層密集地：低層密集地は風の流れが悪く気温も高い。
3. 高層建築：単体の高層建築では風が地上付近に吹き下ろし、建物周囲のみに風速が大きくなる。
   → 高層建築物は一定のリズムのもとに複数配列し風の道をつくる。
4. 信濃川：信濃川は風速が比較的大きい風の道となっている。川に繋がる大きな通りは比較的気温が低い。
   → 信濃川と通り（高層建築の隙間）を結ぶ

シュミレーションから下記の点について取組むこととする。

○建築形態・配置への取り組み
1. 建築物妻面を 45° とし風の道をつくる。
2. 低層部と高層部に別ける。
3. 低層部屋根を緑化する。

＋

○自然エネルギーへの取り組み
1. 建築物屋根面太陽光発電パネル
2. 建築物壁面太陽光発電パネル
3. 垂直型風力発電



■エリアマネジメント

都市再生特別措置法と社会資本整備交付金等を用いた一体的なエリアマネジメントの実施と役割分担

①都市再生特別措置法の改正（要件の緩和）：まちづくり会社等によるエリアマネジメント
　協議会形式（ 多様な主体の参画 ）によるエリアマネジメントの組織化→都市再生整備法人化と都市再生整備計画の提案→統一管理者（まちづくり会社等）による一体的な運営（収入）・管理の実現

②社会資本整備交付金：エリアマネジメントでの計画を受け、行政サイドからの側方支援
　社会資本総合設備計画の作成→基幹事業、関連社会資本整備事業、効果促進事業に整理→実施